

咸臨丸終焉 140 年記念事業

朗読劇脚本

とこしえ

永久に、咸臨丸

作 / 合田一道



鈴藤勇次郎作『咸臨丸難航図』(横浜開港資料館保管)

木古内町観光協会・咸臨丸とサラキ岬に夢みる会

		映像	音楽	照明
	<p>一幕一場(サラキ岬の海岸)・・・実演</p> <p>出演 勝海舟 38歳 福沢諭吉 27歳</p> <p>語り ここは北海道木古内のサラキ岬。茫々たる海岸線。静かに潮騒の音だけが響いています。 何かにとりつかれたように、勝海舟と福沢諭吉がじっと遠くを見つめています。</p> <p>福沢(不審そうに)先生、何か見えるのですか。</p> <p>海舟、憑かれたように海を見つめる。カモメの啼き声。</p> <p>福沢 先生っ、勝海舟先生っ、どうかなさったのですか。 海舟 (ややあって) 福沢君、見えぬのか。ほら、ほら、そ、そ、そこに！ か、か、咸臨丸がっ！ 福沢 ええっ、か、咸臨丸が・・・。 何をいうのです。勝先生！</p> <p>二人が見つめる先に、咸臨丸、忽然と現れる。</p> <p>福沢 おおっ、咸臨丸、咸臨丸だ。 海舟 (あえぐように) うーむ。おいらたちが乗った栄光の咸臨丸だ。 この岬の沖で沈んだはずの船が、...そ、そ、そこに...</p> <p>二人、感動的に立ちすくみ、その場に崩れるように倒れる。(暗転)</p> <p>語り(海舟の妻、民子の語り)あの方は、何かというと、咸臨丸、咸臨丸と申しまして。 咸臨丸が命のような人でした。はい、私、勝麟太郎、海舟の家内の民子と申します。 勝という人は、本当におかしな人でして、何事にも夢中になる質(たち)でしてねえ。あれは安政7年正月、日米修好通商条約の批准のため、アメリカに正使が送られることになった時、遣米使随伴船に咸臨丸が選ばれて。副使の木村摂津守様が乗られ、夫の勝はその船の軍艦教授方頭取、つまり艦長に任命されたのでございますよ。 木村摂津守様をお乗せして太平洋を渡り、アメリカの西海岸まで参り、正使の新見様が無事にワシントンに着かれるのを確認してから、帰国するという大役でした。 安政7年1月17日、咸臨丸は正使の乗るポーハタン号より一足早く、浦賀を出帆しました。ところが...</p>	 <p>サラキの夕暮れの写真</p>  <p>夕暮れに咸臨丸の写真</p> 	<p>重い曲</p> <p>しばらく曲のみ</p> <p>海の音</p> <p>かもめの啼き声</p> <p>↓</p>	<p>ほの暗く</p> <p>真闇</p>

	<p>一幕二場（咸臨丸船上）</p> <p>出演 勝海舟 38歳 福沢諭吉 27歳 木村撰津守 31歳 鈴藤勇次郎 35歳 小野友五郎 45歳 中浜万次郎 34歳 ブルック大尉</p> <p>語り 咸臨丸は浦賀を出航するや二十年ぶりの暴風雨に巻き込まれ、それはそれは大変な荒れようで、想像を絶する凄さだったと申します。太平洋の荒波にもまれる咸臨丸の船上では、勝海舟や木村撰津守など日本人のほとんどが船酔いで倒れるなか、小野友五郎、中浜万次郎、そしてアメリカ兵が立ち働いて船を操っていたそうです。</p> <p>海舟 うっ、うむっ、なぜ荒れる、腹が痛い。ブ、ブ、ブルック大尉を呼べっ。</p> <p>福沢 はいっ。（よろめくように立ち去る）</p> <p>ブルック大尉（急ぎ足で駆け寄り）ダイジョウブ。アンシンシナサイ。アナタ、ヘヤデヤスミナサイ。テイトクモヤスンデイマス。</p> <p>海舟 うむっ、頼む。何としてもアメリカ大陸まで行かねばならぬ。</p> <p>ブルック大尉 ヤリマス。ワタシノメンバー、ウデイイ。シンバイナイ。</p> <p>海舟 す、すまぬ。</p> <p>語り ブルック大尉は、小野、万次郎らに船の帆を下ろすように指示。間もなくして船の揺れも少しおさまったようです。</p> <p>ブルック大尉（部屋で日記を書き、読む） カツカンチョウハゲリヲオコシ、キムラテイトクハフネニヨッテイル。ニホンジンハゼンイン、フナヨイダ。</p> <p>語り もしブルック大尉らが同乗していなかったなら、どうなったものか。このブルック大尉らアメリカ軍人たち十一人は、日本周辺の測量をしている時、暴風雨に会い、船体を岩場にぶつけて破損して、帰国できないでいたのです。そこで勝は、アメリカに帰国させてやるから、その代わりに、操船が困った時は助けてくれ、とあって、同乗させたのです。出帆早々、勝の読みがあたってたってわけですね。（少し間）</p> <p>でもね、嵐の航海を乗り切ることができたのは、ブルック大尉だけじゃない、忘れてはならないのは塩飽や長崎からきた水夫の人たち、水主（かこ）と呼ばれていたそうですけど、その人たちのお蔭で乗り切れたんですよ。塩飽に代々受け継がれた操船術と器量が咸臨丸を助けたんですね。</p> <p>水主A （船に激しく揺られながら）おー、この船、大丈夫かー</p> <p>水主B ばかなこと言うな。何を心配しとるんや。俺たちが何とかしなくちゃ、この船はお陀仏だぜ、俺たちも死んじゃうんだぞ。</p> <p>水主A それにしても、この揺れはただごとじゃないぜ。</p> <p>水主B ばかやろー。</p> <p>水主A 俺たちにはなー、塩飽の水軍の神様がついとるんじゃ。</p> <p>水主A す、水軍の神様・・・そうか。</p> <p>今こそ、俺たち塩飽の腕の見せ所か。</p> <p>水主B あれこれ言わんで、早く水をかき出せ！</p> <p>水主A はいやー</p>	<p>鈴藤の咸臨丸 絵図</p>    <p>水主の写真</p> 	<p>重い曲</p> <p>暴風雨・荒れる海の音</p>	<p>真闇</p> <p>ほの暗く</p>
--	---	---	------------------------------	-----------------------

	<p>でも、こんなこともあったそうですよ。へそ曲がりな人ですから、上司である副使の木村撰津守様と衝突したりして。勝は太平洋のど真ん中で中で「日本に船をもどせ」なんて無茶なことも言ったそうです。本当に無茶な人でした。</p> <p>海舟 よござんす。操船は全部、撰津守様にやってもらいましょう。 木村 何を申す。勝殿がいなければ、この太平洋を横断できるはずがないではないか。 海舟 いいや、おいら、もう用事がねえから江戸へけえりせ。運用方、バッテリーをおろせ。 木村 やめないか。勝さん。 ブルック大尉 イケマセン。コンナタイヘイヨウノマンナカデ、ムチャライツチャア、イケマセン。 海舟 うるせえー。</p> <p>慌てて海舟を押しとどめる者、困りはててうろろろする者など。</p> <p>語り なーに。うちの人は艦長といったって四十一石取りのしがたい御家人。相手の撰津守様は二千石取りの軍艦奉行です。年齢が若いのに、自分の上にいるのが癖にさわったんでしょね。</p> <p>咸臨丸、悠々と太平洋を進む。月が出る。</p> <p>語り 出帆して五日目になって、荒れ狂っていた波も鎮まり、月まで出てきました。船酔いしていた乗組員たちも起きだしてきました。船は風を受けて順調に進んでいきます。一日、六、七里という日もあれば、百里も走る日もあったといいます。でも、三十数日のうち晴れた日は七日間だけといいますから、よほど難儀な航海だったんですねえ。乗組員たちが船の先端にきて、わいわい騒いでいますよ。</p> <p>小野 おい、あれは何だ。鯨か。 万次郎 イルカですよ。このあたりはイルカの回遊する海域なんですよ。 福沢 そうか。 小野 万次郎さんは、世界をまたにかけた海の男。さすがにくわしいですね。 万次郎 しかし、小野友五郎さん、あなたの測量術は見事です。いま、船はどのあたりにいるのでしょうか。 小野 北緯 42 度 23 分 7 秒。西経 169 度 46 分 37 秒。ちょうど日付変更線を通過したところです。江戸から 1223 里。きょうでもう 22 日になります。 万次郎 さすが、友五郎さん。 福沢 小野さんは、すごいですねえ。敬服しましたよ。</p> <p>語り 船はそれから風や波に襲われながらも、アメリカ西海岸に向けて突き進みました。途中、飲み水が足りなくなり、水桶に錠をかけて誰にも触れさせない処置を取るなどして。考えられない苦勞をしたようです。2月24日、小野友五郎様が「アメリカ西海岸まで120里ばかり。順調にいけばあと二日で到着」と書いた貼り紙を出したのです。</p> <p>万次郎 あと、二日かっ。 福沢 しかし、ブルック大尉は、まだ三日はかかるといって否定していましたよ。 万次郎 そうですか。私は友五郎さんの測量術を信頼していますから、きっと言う通りになると信じています。 福沢 そうかなあ。そうなればいいのだが。</p> <p>語り そして二日後、小野友五郎様の推測通り、左手の一点に山影が望まれたのです。アメリカ西海岸、カリフォルニアの大地でした。大勢の乗組員たちが船橋に集まってきて、前方の陸地を見ながら、興奮して口々に、「おおっ、陸地だ」「アメリカだ」などと叫んでいました。</p>	 <p>乗組員写真</p>  <p>月が浮かぶ静かな海の写真</p>  <p>乗組員写真</p>  <p>咸臨丸写真</p>  <p>アメリカ西海岸の写真</p> 	<p>重い曲 (続き)</p> <p>静かな曲</p> <p>静かな波の音</p> <p>↓</p> <p>明るい曲</p> <p>↓</p>	<p>ほの暗く</p>
--	--	--	---	-------------

	<p>万次郎 やったぞっ。友五郎さんの読みが当たったぞっ。 福沢 (涙をぬぐいながら) すごいで。アメリカに勝ったぞ。小野様がアメリカをしのいだぞっ。 勝 うんっ、ついにアメリカだ、アメリカについたぞ。</p> <p>語り それはもう、大変な騒ぎでした。こうして咸臨丸の夫、勝海舟らはサンフランシスコに上陸し、アメリカから賓客として心からの歓待を受けたのです。でも、初めて見る異国は想像を絶したと申します。羽織袴で正装した木村摂津守様や夫の勝らは晩餐会に招かれて、ナイフやフォークという見慣れないもので肉料理を味わい、アイスクリームという珍しい食べものまでいただき、ピアノという初めて聞く演奏に肝をつぶしたのです。</p> <p>一幕三場(映像)</p> <p>晩餐会の音楽流れる。 (映像で) 着飾ったサンフランシスコ市長や区長、及び美しく着飾った夫人たちのダンス。 踊る姿に、呆然と見とれる海舟たち。</p> <p>語り こうした異国の体験は、大きな衝撃を受けました。いまは、カルチャーショックなんていうんですってねえ。 (間) 咸臨丸の夫、勝海舟らが、無事に浦賀に帰ってきたのは安政7年5月5日でした。 勝は、日本人だけで太平洋を横断したと申しておりますが、それは復路だけの話です。外国人を極端に嫌っていた時代ですから、勝は、帰国するアメリカ人をうまく利用して太平洋を横断したわけです。ええ、それくらいの芸当はやってのける人でしたからねえ。ほっほっほ。</p> <p>語り 咸臨丸が帰国したころ、国内は尊皇攘夷の嵐がしだいに高まっています。異国と交渉を持った幕府大老の井伊直輔が水戸藩浪士らに襲われて絶命しました。外国人を見つけると、物もいわずに切り捨てる、異人斬りが横行し、ロシア艦の士官と水兵、フランス公使の付き人の中国人などが次々に殺されました。外国公使から厳しい抗議を受けた幕府は、外国人居留地の警戒を強めましたが、事件はなかなかおさまりませんでした。 咸臨丸はこのころ、神奈川警備につき、異国人に対する不穏な動きを見張ったり、対馬や小笠原島へおもむき、警戒に当たっていました。国内がせわしなく動く中、うちの人には講武所砲術教授方になり、軍艦操練所頭取から軍艦奉行並、そして軍艦奉行に取り立てられました。あの坂本龍馬さんが飛び入りでうちの人の子になったのは、この頃のことですよ。</p> <p>(映像) 坂本龍馬。(少し遅れて、榎本武揚)</p> <p>語り 文久2年6月、咸臨丸はオランダ留学生榎本武揚様らに乗せて長崎へ赴きました。 榎本様らは長崎で異国船に乗り換え、オランダへ向かったのです。後で考えてみると、不穏な空気に包まれていたとはいえ、この時期が、咸臨丸にとっても、うちの人にとっても、もっとも充実していた時期だった、といえるかもしれませんね。</p>	<p>米国での様子</p>  <p>晩餐会写真</p>  <p>乗組員写真</p>  <p>江戸城の写真</p>  <p>外国との闘い</p>  <p>勝</p>  <p>坂本</p>  <p>榎本</p>  <p>咸臨丸写真</p> 	<p>明るい曲 (続き)</p> <p>↓</p> <p>明るい踊り曲</p> <p>↓</p> <p>重い曲</p> <p>↓</p>	<p>一瞬真 闇</p>
--	--	---	--	------------------

	<p>二幕一場（二条城内）・・・実演</p> <p>出演 徳川慶喜 老中 諸藩藩主A・B</p> <p>砲弾が乱れ飛ぶ音。喚声。官軍と幕軍の交戦(ゴミ拾い侍の実演)</p> <p>語り 文久3年8月、公武合体派の朝廷クーデターが起こり、長州派公卿が追放されました。続いて天誅組が挙兵し、京都は騒然となりました。「八・一八の政変」です。 翌文久4年には禁門の変が、続いて四力国の異国の連合艦隊が下関を攻撃しました。 国内は、いまに異国に乗っ取られるとおののきました。 幕府将軍、徳川慶喜が突然、「大政奉還」に踏み切ったのは慶応3年10日のことでした。 京都・二条城の大広間には在京の藩主や家老らが集まり、間もなくして老中がやってきました。</p> <p>老中 静まりなされ。お静かに。上様が参られますぞ。本日、上様より、皆にご内意が伝えられます。席にお着きなされ。</p> <p>近習 上様、おなりーい 老中等 ははー</p> <p>前面に徳川慶喜、座る。</p> <p>慶喜 余は土佐藩主、山内容堂の建白を容れ、ここに大政を奉還する。</p> <p>慶喜、それだけ言うと立ち上がり、奥へ去る。 藩主、家老ら、たがいに顔を見合せ、右往左往している。</p> <p>藩主A 上様が奉還するなとは、上様は血迷われたか。 藩主B 幕府がなくなってしまうということか 藩主A なんとということだ 藩主B 拙者はすぐにでも国もとへ帰ります。</p> <p>静まり返る城内。</p> <p>語り あの日、将軍・慶喜様は、本気で大政を朝廷にお返しするつもりだったのでしょか。 勝に言わせると、「なあに、おれが将軍職を辞めても、誰もその後を継げる者など、いるはずがない。尊皇だ、攘夷だとさわいでいるやつらを、すこしばかり驚かしてやれ、いずれ朝廷は、また頼むと頭を下げてくる...、それくらいしか考えていなかったと申すのです。 たしかに朝廷は大政奉還を認めたのですが、慶喜様に政治向きはこれまで通り行え、と申し渡しました。夫・勝の推測の通りでした。 ところが...</p> <p>戦争の音。激しいせめぎ合い。 官軍と幕軍の交戦(ゴミ拾い侍の実演)</p>	<p>ゴミ拾い侍の実演 幕末交戦図</p>  <p>二条城写真</p>   <p>徳川慶喜</p>  <p>幕末交戦図</p>  <p>ゴミ拾い侍の実演</p>	<p>静かな曲</p> <p>大砲や交戦の音</p> <p>大砲や交戦の音</p> <p>大砲や交戦の音</p>	<p>ほの暗く</p> <p>ほの暗く</p>
--	---	--	--	-------------------------

	<p>二幕二場（開陽丸船内）</p> <p>出演 勝海舟 榎本武揚</p> <p>語り 鳥羽・伏見で、幕府軍と薩摩・長州軍がぶつかり合い、戦いになったのです。ええ、戊辰戦争の始まりです。幕府軍は圧倒的な戦力だったのですが、薩摩、長州軍は、大砲や銃などの近代兵器を使って、ドカン、ドカンとやるもんですから、たまったもんじゃない。幕軍はあつという間に敗れてしまって。 朝廷は勝った薩摩、長州軍を朝廷方の軍隊として認めたもんですから、幕府方は朝敵にされてしまって。ほら、勝てば官軍って言葉があるでしょ。あれですよ。 うちの人、勝海舟は、好むと好まざるとに関わらず、徳川家の代表として話をまとめる立場で、朝廷・新政府との交渉に当たることになったのです。それは命がけのものでした。 江戸を攻撃する新政府軍の参謀、西郷隆盛と会って何とか戦争をくい止め、江戸は砲火から免れることができたのですが、海軍を率いる榎本の釜さんは、言うことを聞きやしません。艦隊を率いて館山沖へ姿をくらましてしまった。勝は困り果て、単身、釜さんの軍艦に乗りつけて…。</p> <p>開陽丸の艦長室。外で榎本の部下たちが騒いでいる。</p> <p>海舟 釜さん、そりゃ、いけねえよ。軍艦を率いて朝廷を脅すなんて、いけねえよ。 榎本 わかってください。勝さん。徳川が、なぜ朝敵にならなければ、いけねえんですかい。徳川が朝廷に、何をしたっていうんですかい。勝さんは、卑怯だ。戦わないで鉾を収めるなんて、おれにはできねえ。</p> <p>海舟 まだわからぬのか。榎本釜次郎よ。いいか、よっく考えるんだ。おめえさんが憎んでいる薩摩や長州は幼い天皇様を担いで官軍顔している。そりゃあ、気持ちはわかる。だがなあ、ここが辛抱のしどころだ。戦ったらおめえさんのいう通り、勝つかもしねえ。いや、おめえさんの指揮する海軍なら、勝つだろうよ。しかし、勝っても勝ちにならねえんだよ。</p> <p>榎本 勝ちに、ならねえ？ 海舟 ああ。そういうことだ。上様は、戦う気なんかありやしねえんだ。戦って、勝っても、朝廷に弓を引いた極悪人にされてしまう。それをちゃんと知っているんだよ、あの方は。</p> <p>榎本 だからといって、このまま手が引けるか。このままおめおめと。 海舟 釜さん、ここんところは俺の考えに合わせてくれねえか。 榎本 何と。何をしようというのいうのでやんすか。 海舟 うむ。まず朝廷に軍艦も輸送船も、全部差し出すんだ。 榎本 差し出す？ なぜ、そんなことをせねばならぬのだ。幕府が作り上げた最強の艦隊ではないか。 海舟 わからぬか。そいつをそっくり差し出して、そして改めて、徳川家に少しだけお譲り願いたい、と下手に出るんだ。そうになったら朝廷は、新政府は、どう出ると思う。 しかたがねえ、少しは相手の顔をたててやらあ、となるだろう。そこだ。 榎本 ふーむ。 海舟 そこで、おめえさん。そのうち大事な軍艦を選んでもらっちゃうんだよ。こいつとこいつは、こっちでいただくってな。ああ、その点は、俺に任せろ。うまくやってやる。そうなれば、おめえさん、筋が通ってもんだらうよ。 榎本 ふーむ。そうか。 海舟 はっはっはっ。 榎本 はっはっはっ。</p> <p>笑いながら、最後は真顔になり、抱き合い二人。</p>	<p>江戸城の写真 </p> <p>西郷と勝の会談の絵図 </p> <p>開陽丸写真 </p> <p>勝海舟と榎本武揚の写真 </p>	<p>重い曲</p> <p>↓</p>	<p>真暗</p>
--	--	--	---------------------	-----------

	<p>語り 勝海舟と榎本武揚。この二人、どちらも江戸っ子でして。長崎の海軍伝習所の先輩後輩に当たるんです。だからおたがい、心の中はお見通し。口は悪いが、心底喧嘩する気なんぞないんです。面白いもんですねえ。男ってというのは。ふっ、ふっ、ふっ。</p> <p>結局、釜さん、いや、榎本武揚様は幕府海軍の軍艦八隻を全部差し出して、改めて徳川家に四隻もらい受けたんです。しかももらったのは開陽丸幡竜丸、回天丸、神速丸・・・と優秀な軍艦ばかり。それに輸送船となった咸臨丸も。相手に渡したのは、ええ、ボロ船ばかりだったんですって。</p> <p>二幕三場（咸臨丸船内）</p> <p>出演 榎本武揚 咸臨丸船長 小林文次郎 同副船長 春山弁蔵 準士官 春山鉦平 乗組員 A・B 官軍兵士 A・B</p> <p>暗闇の海。江戸・品川沖。 榎本艦隊（軍艦4、輸送船4）が勢ぞろいしている。輸送船のうちの一隻は咸臨丸だ。咸臨丸に軍勢がどんどん乗り込んできた。咸臨丸は回天丸に曳航されている。</p> <p>高らかに出航の合図が鳴る。</p> <p>語り 慶応4年8月20日夜、江戸・品川沖。榎本武揚様は開陽丸を旗艦にした旧幕府艦隊八隻に二千数百の軍勢を乗せ、江戸・品川沖を密かに出航しました。 咸臨丸は機関をはずしていたので、回天丸が曳航しています。</p> <p>榎本 （訓示）王政日新は皇国の幸福、我輩もまた希望する所なり。しかるに当今の政体、その名は高名盛大なりといえども、その実はしからず。王兵の東下するや、わが老寡君（ろうかくん）をぶふるに朝敵の汚名をもってす。これ一（いつ）に強藩の私意（しい）に出で氏日、真正の王政にあらず。我輩泣いてこれを帝閣に訴えんとすれば、言路梗塞（げんろこうそく）して情実通ぜず。放（はな）に此の地を去り、長く皇国の為に一和の基業を開かんとす。</p> <p>船、波を蹴って進む。</p> <p>語り 艦隊は北を目指して突き進みました。行く手は仙台。その先に蝦夷地へ向かおうという目論見なのです。ところが品川沖を出て間もなく、風が強くなり、海が荒れだしたのです。</p> <p>荒れる海。翻弄される咸臨丸。揺れる軸先に立ち、指揮する船長の小林文次郎、副船長の春山弁蔵。甲板を慌ただしく駆け回る乗組員らに指示する。</p> <p>小林 （乗組員に）とも綱は大丈夫か。帆を緩めろ。 春山弁蔵 （乗組員に）急げ。</p> <p>一瞬、轟音とともに咸臨丸座礁。乗組員、ぶっ飛ぶ。</p> <p>小林 どこだ。ここは、どこだ。真っ暗闇で見えぬ。 春山弁蔵 針路から、観音崎あたりかと。</p> <p>再び轟音。揺れて、船、大きく傾く。しぶき激しく上がる。</p> <p>小林 ううーっ。座礁か。全員、甲板に出ろ。 春山 回天に伝えろ。船を、船を、暗礁から引き離すのだ。</p> <p>動けない咸臨丸。綱を渡し、離礁を試みる回天丸。</p>	 <p>咸臨丸</p>  <p>品川沖開帆之図</p>  <p>訓示の文言図</p>  <p>暴風雨に翻弄される船の絵図</p>	<p>重い曲 (続き)</p> <p>↓</p> <p>静かな曲</p> <p>海之音</p> <p>ドラの音</p> <p>↓</p> <p>重い曲</p> <p>怒濤の音</p> <p>↓</p>	<p>真闇</p> <p>ほの闇</p> <p>真闇</p>
--	--	---	--	--------------------------------

	<p>語り 回天丸の艦長、甲賀源吾殿の命令で、何度も何度も離礁が試みられ、何とか暗礁から離れることができた時、すでに夜はしらじらと明けていました。しかも艦隊は離ればなれになり、威臨丸と回天丸だけが取り残されてしまったのです。</p> <p>浦賀にいったん入った威臨丸は、再び回天丸に曳航されて出航したのですが、またも暴風雨にたたかれ、曳航綱は引きちぎられ、転覆の恐れが出てきたのです。船長の小林殿は船の安定を図るため、やむなく三本のマストのうちもっとも大きいマストを切り倒したのです。悲壮な決断でした。</p> <p>小林 これでは、もう奥羽へ行くのは難しい。風をたよりに、駿府へ向かうほかあるまいぞ。</p> <p>春山 いかにも。さて、はたして駿府まで行けるかどうか。</p> <p>語り その時、同乗した小田原藩士の記録が残っています。</p> <p>藩士の記録（朗読）東北風強く、逆浪（ぎやくろう）天に沖（ちゅう）し、各船皆危険なり。巨濤（きょとう）湧起し甲板を洗い、マストを打ち、海面は忽（たちま）ち変じて山となり、また谷となる。また風中の枯れ葉の如く、目眩（くら）み、心震え、その困難、名状すべからず。…余は新たな衣服を着し、刀を帯、素縄をもって身を縛し、拳銃を握って死を待ちたり。</p> <p>乗組員 A おおっ、陸地だっ。駿府の清水港だっ。</p> <p>その声に、乗組員らどやどやと甲板に集まってくる。</p> <p>乗組員 B 清水の折の浜だぞ。</p> <p>乗組員 A われらが徳川家の新しい領地だっ。助かったっ。</p> <p>などなど口々に。喜びに溢れる甲板。</p> <p>小林 拙者、すぐにも駿府藩へ赴き、事の次第を報告致そうと存ずる。しかる後に船体を直し、艦隊の後を追いかけるつもりじゃ。</p> <p>春山 はい。そのようになさりませ。すぐにも船体の修理に取りかかりましょう。それまで、陸兵を上陸させ、英気を養わせようと存じます。</p> <p>小林 左様、頼む。</p> <p>春山 陸へ居っ、上陸、用意っ。</p> <p>語り 品川沖を出航して、すでにひと月近くが経とうとしておりました。悲劇が起こったのは、慶応から明治と改元されて間もなく、船が着いた翌日のことでした。船長の小林が、艦隊の脱走についてその正当性を説明しようと、再び駿府藩庁に赴いた直後のことでした。突然、砲丸が威臨丸を襲いました。</p> <p>乗組員 A 敵は、新政府軍の艦隊っ。富士山丸に飛竜丸、武蔵丸っ。</p> <p>春山 鋳平 よしっ。（弁蔵に向かい）兄上っ、相手は、攻撃を続行中っ。だが当方は輸送船。大砲も備えておりませぬ。</p> <p>春山 弁蔵 抵抗してはならぬ。急げっ。</p> <p>春山 鋳平 白旗を掲げろっ。</p> <p>乗組員 A （白旗を振り）撃つなっ、撃つなっ。この旗をみよっ。</p> <p>語り 新政府軍の砲弾が乱れ飛び、甲板の乗組員はバタバタと倒れ、海中に落ちて死ぬ者も出ました。敵艦が接近して、威臨丸に新政府軍の軍勢が抜刀してどっと売り込み、春山弁蔵さんを取り囲みました。</p> <p>官軍兵 A 朝廷の艦船を盗むとは不埒千万。許せぬっ。</p> <p>官軍兵 B 抵抗する者は切るっ。貴様ら、天皇様を何と心得るかっ。</p> <p>春山 弁蔵 待てっ、待たぬか。拙者らの船は輸送船なり。戦うの意志あらず。引けっ、引けっ。</p> <p>官軍兵 A 何をこしゃくなっ。（と弁蔵を押さえつける）</p> <p>春山 鋳平 貴様らっ、兄上になっ、手を出す気かっ。（刀を抜く）</p>	<p>荒れる海の威臨丸</p>  <p>静岡の陸地の写真</p>  <p>海戦の絵図</p> 	<p>重い曲 (続き)</p> <p>↓</p> <p>静かな曲</p> <p>↓</p> <p>重い曲</p> <p>大砲の音</p> <p>↓</p>	<p>真闇</p> <p>ほの闇</p> <p>真闇</p>
--	--	--	---	--------------------------------

	<p>戦いになり、春山弁蔵、鉦平、銃弾を浴び死ぬ。一人が火薬庫に火をつけ、爆破。甲板は火の海に。死者続出し、腹を切ろうとする者も出る。官軍と幕軍の交戦(ゴミ拾い侍の実演)</p> <p>小林 待てっ、待たぬか。(駆け寄り)船長の小林文次郎であるっ。このざまはなんたることかっ。 官軍兵A おおっ、敵将だっ。 官軍兵B 召し締めっ。この天朝を欺く者どもをっ。</p> <p>どっと駆け寄り、小林を取り巻いてぐるぐる巻きにし、殴る、蹴るの続ける。小林、血まみれになり、意識を失い、昏倒。敵兵らは死体を海に投げ込む。 官軍と幕軍の交戦(ゴミ拾い侍の実演)</p> <p>語り それはそれは、凄まじいものでした。新政府軍は殺害した徳川の人々の遺体を海中に投げ込み、船長の小林らを捕虜にし、咸臨丸を拿捕して、悠々清水港を引き上げたのです。咸臨丸の悲しい最期でした。清水港は、死の海と化しました。海面には遺体が浮きつ、沈みつていますが、新政府に恐れをなして、誰も近寄ろうとしません。</p> <p>暗闇の清水港の沖合。 海中に漕ぎだす小舟。黒い影が海面に浮かぶ遺体を引き揚げる。</p> <p>乗組員A ひでえ、遺体だ。これが天朝様のやることか。ちくしょうっ、いまに見ているっ。 乗組員B おいっ、静かにしろ。</p> <p>語り その時、遺体の収容に立ち上がったのが、清水港の親分、次郎長こと、山本長五郎でした。長五郎は、「死んで官軍も賊軍もあるものか」といって、子分たちを動員して、一夜のうちに遺体を全部、引き揚げ、江尻の浜に葬ったのでした。 「おれは無学だから、官軍がいいのか、賊軍が悪いのかなんて、わからねえ。しかし主家の徳川家のために死んだ屍を、このまま見捨てるわけにはいかねえ」って。 いい気っばですねえ。ほれほれしちゃいますね。長五郎って男は。</p> <p>男の声で、五言絶句を詠む。(文字、映像で)</p> <p>砂広くして孤松(こしょう)秀(ひい)で 空しく留(とど)む壮士(そうし)の墓 水鳥何をか恨(うら)む 飛んで夕陽に向かって鳴く</p> <p>三幕一場(咸臨丸船内)</p> <p>出演 佐藤孝郷 家老、開拓執事 22歳 三木勉 家老 42歳 乗船者</p> <p>語り 榎本様が率いる旧幕府軍は一気に蝦夷地の箱館・五稜郭を奪い、松前を征服しましたが、翌明治2年夏、新政府軍は乙部から上陸して反撃を開始し、壮絶な戦いになりました。ここ木古内でも激しい戦いがありました。新政府軍は次々に後続を送って攻め込み、旧幕府はしだいに劣勢になり、榎本様はついに降伏します。 こうして北の大地まで揺るがした戊辰の戦いは終わりを告げたのでした。 咸臨丸が再びその姿を現したのは、新しい明治の御代になり、開拓使が発足して間もなくのことでした。清水港でだ挿された後、大がかりな修理がほどこされ、開拓使の輸送船になったのでした。 明治4年9月12日、咸臨丸は、北海道に移住する仙台藩白石領の片倉小十郎の家臣らに乗せて、仙台の寒風沢港を出航しました。戊辰戦争で敗れた人たちが、悲壮な覚悟で故郷を捨て、新しい天地を目指したのでした。</p>	<p>ゴミ拾い侍の交戦実演</p> <p>ゴミ拾い侍の交戦実演</p> <p>暗い海の絵図 </p> <p>清水長次郎 </p> <p>五言絶句の字幕絵 </p> <p>箱館戦争絵図(土方・伊庭・榎本等写真) </p> <p>寒風沢の写真 </p> <p>白石家臣写真 </p>	<p>爆発音</p> <p>↓</p> <p>静かな曲</p> <p>↓</p> <p>生歌(吉澤)</p> <p>↓</p> <p>重い曲</p> <p>↓</p>	<p>ほの闇</p> <p>↓</p> <p>ほの闇</p>
--	--	---	---	--------------------------------

	<p>暗い音楽。波浪に揺れる咸臨丸。</p> <p>語り ところが途中、暴風雨にたたかれ、咸臨丸は南部沖の太平洋上まで遠く流され、乗船者たちは船酔いを起こして苦しみます。そんな中、お腹の大きかった女性が赤子を流産し、船内で亡くなったのです。移住団をまとめる家老の佐藤孝郷様は、急ぎ小樽行きを航路を変え、函館に着いたのです。 葬儀を済ませた一行は、函館から再び咸臨丸に乗り込み、出航しました。 この日、明治4年9月20日昼過ぎのことでした。</p> <p>三木 出航、出航 乗船者 今度こそ小樽に着けるぞ。いよいよ新しい土地だ。 三木 もう少しの辛抱じゃ、さあ、出航じゃ。</p> <p>船が岸壁を離れる。明るい表情で岸辺の明かりを見る乗船者たち。</p> <p>語り 咸臨丸は函館の港を離れて、目的地の小樽を目指して津軽海峡を西に向かいました。 ところが夕方になるころから急に風がひどくなり、咸臨丸は高波に襲われました。 突然、ドーンと暗礁にぶつかったのか、咸臨丸は座礁して傾き、船内は大混乱になりました。 咸臨丸には3歳の赤子から83歳のお年寄りまで401名もの人々が乗っていたのですから、泣き声や叫び声が響きわたりました。</p> <p>三木 (乗船者たちに向かい) 騒ぐなっ。落ちつけっ。 佐藤 気をしっかり持てっ。家族は家族で離れるなっ。 三木 岸辺に灯が見えるぞ。(佐藤に向かい) このあたりでしょう。 佐藤 わからぬ。函館を出てふた時、釜谷か、泉沢あたりか。うっ? ここは、サラキ岬、サラキ、み、さ、き... 三木 サ、ラ、キ...</p> <p>混迷する船内。荷物を背にした乗船者たちが右往左往する。 一瞬船内が真っ暗になる。</p> <p>三木 拙者、あの灯の見える村へ行き、遭難を伝えます。佐藤様、救助船を頼んで送り込むので、老人や子どもから先に救助船に乗せてほしい。お願い申す。 佐藤 しかし、下船も、乗船順にするのが筋というものだろう。 三木 何を申します。この危急の時に、執事殿のお言葉とは思われぬぞ。拙者の母は高齢でござる。何とか・。 佐藤 (言葉を遮り) 黙らっしゃい。家老三木殿とも思われぬお言葉。いまは執事である拙者の命令に、従っていただきたい。 三木 何っ。何が・。わからぬか、この気持ち(いきなり腰の刀に手をかける)</p> <p>驚いて止めに入る男たち。</p> <p>三木 (男たちに) 後は頼むっ。</p> <p>三木、いきなり、海中に飛び込み、 抜き手を切って岸辺へ。</p> <p>語り 生きるか死ぬか。それは切迫した雰囲気だったと申します。家老の三木様は、三百メートルほど離れた岸辺にたどり着き、村の家々に遭難を知らせたのです。 この村が現在の木古内町泉沢の集落だったのです。</p>	<p>海上の咸臨丸</p>  <p>津軽の海</p>  <p>佐藤孝郷</p>   	<p>重い曲(続き)</p> <p>暴風雨の音</p> <p>ドラの音</p> <p>岩礁の衝突音</p> <p>海に飛び込む音</p>	<p>真闇</p> <p>真闇(続き)</p>
--	--	---	--	-------------------------

	<p>三幕二場（サラキの海岸）</p> <p>出演 新井田久治郎 若衆A</p> <p>語り 急報を受けた名主の新井田久治郎様は、若者たちに命じてすぐに小型船を出し、救助に向かったのです。</p> <p>びしょ濡れになりながら、救われて岸边に降りる人々。</p> <p>新井田 おうおう、すっかり濡れてしまったな。ささ、はよう、はよう、家に入って暖まるのじゃ。（若者に向かい）すぐに案内申せ。</p> <p>若衆A はいっ。ささ、どうぞ、こちらへ。</p> <p>乗船者A ありがとうございます 乗船者B やっと生きた心地がしたわい</p> <p>語り こうして咸臨丸に乗っていた白石の片倉小十郎家臣団401名は、全員無事に救われたのです。 この泉沢の人々の厚い情けで、一夜を過ごしたのです。</p> <p>明るい音楽。</p> <p>語り こうして咸臨丸の人々は、後からきた庚午（こうご）丸に移って小樽に向かいました。そうして、現在の札幌市の白石、手稲を作り上げたのです。 しかし、後になって、意外な事実が明らかになったのです。実は咸臨丸が遭難した日は、月がこうこうと照り、海上は金波銀波で光っていたというのです。 そう、あの日は暴風雨なんかじゃなかったんです。更木岬という岬は、なだらかに沖合に突き出していて、まだ海図もなかった時代ですから、航海する船にとっては難儀な場所だったんでしょう。操船を失敗して暗礁に乗り上げたのを知った開拓使は、この際、原因を天候のせいにして、もみ消してしまっただけです。 歴史のひだに隠れた意外な事実とでも申しませんか。</p> <p>一転、暗闇に。</p> <p>三幕三場(サラキ岬海岸)・・・実演</p> <p>出演 勝海舟 福沢諭吉</p> <p>再びサラキ岬にて、 勝海舟と福沢諭吉が佇み、海を見つめている。</p> <p>福沢 （不審そうに）先生、何か見えるのですか。</p> <p>海舟、憑かれたように海を見つめる。カモメの啼き声。</p> <p>福沢 先生っ、勝先生っ、どうかなさったのですか。 海舟 （ややあって）福沢君、見えぬのか。 ほら、ほら、そ、そ、そこに！ か、か、咸臨丸がっ！ 福沢 ええっ、か、咸臨丸が。何をいうのです。勝先生！</p> <p>二人が見つめる先に、咸臨丸、忽然と現れる。</p> <p>福沢 おおっ、咸臨丸、咸臨丸だ。 海舟 （あえぐように）うーむ。おいらたちが乗った栄光の咸臨丸だ。 この岬の沖で沈んだはずの船が、...そ、そ、そこに...。</p> <p>二人、感動的に立ちすくむ。</p>	<p>サラキの海岸</p>  <p>サラキの夕暮れの写真</p>  <p>サラキの夕暮れに咸臨丸</p> 	<p>明るい曲</p> <p>↓</p> <p>重い曲</p> <p>↓</p> <p>海の音</p> <p>↓</p> <p>かもめの啼き声</p> <p>↓</p>	<p>ほの闇</p> <p>真闇</p>
--	--	--	--	----------------------

	<p>朗読劇終了</p> <p>スタッフ・キャストの紹介</p> <p>『岬めぐり』の合唱</p>	<p>これまでの連続写真</p>	<p>重い曲(続き)</p> <p>↓</p> <p>咸臨丸の歌 生歌(工藤)</p> <p>↓</p> <p>岬めぐり (合唱)</p>	<p>明るく</p>
--	---	------------------	---	------------

